

入中1年人権だより

徳島市 八万中学校
1年生 第11号
2022年12月12日
編集・文責 吉成正士

鳴潮

「すすめ!!パイレーツ」などで知られる人気漫画家・イラストレーターの江口寿史さんは、熊本県水俣市出身だ。父親の転勤で千葉県に移るまで、14年間をこの地で暮らした。そんな縁から、水俣市の観光ポスターやマンホールのイラストを手掛けている▼ポスターの一つは、「恋人の聖地」にも認定されたエコーパーク水俣が舞台だ。ハート形のオブジェが置かれた親水護岸を、高校生カップルが歩く。沖合に浮かぶのは、その名も恋路島▼この広大な公園は、不知火海を埋め立ててできた。水俣病の原因物質・有機水銀で汚染された海を。大勢の命を奪ってしまった海を▼植え込みには、数十体のお地蔵さんが置かれている。魂石と呼ぶそう。〈不知火の海に在るすべての御霊よ／二度とこの悲劇は繰り返しません／安らかに眠りください〉と刻んだ慰霊碑も立つ▼ここからタクシーで10分ほどの場所に、患者支援団体が運営する水俣病歴史考証館がある。救済闘争で漁民が掲げた「怨」の旗、画家の丸木位里・俊夫妻の「水俣母子像」が目を引く。船と船を結ぶ「もやい綱」のように、住民同士の「もやい直し」の動きも伝えていた▼水俣への短い旅を終えて、思い浮かぶのは波静かな不知火の海だ。冬の日差しを浴び、海面をきらきら輝かせながら訴えていた。この海を忘れないでーと。

2022.12.10

と、ここまで書いたところで、10日土曜日の朝、↑のような新聞記事に出会いました。

先日、ここに書かれている水俣病歴史考証館の永野さんという方にお会いする機会がありました。そのときにいただいた本をみなさんに紹介しようと思い、全体学習に持っていったのですが、時間がなくてできませんでした。

実はその本には、福島の高校生のことが書かれていました。「水俣と福島？」と思う人も多いかもしれません。でもあの原発事故のあと、福島の方が水俣に学びに来ることが増えたのだそうです。水俣を案内すると、「わかります!」「今まさに福島がそう!」と、表情が変わっていくことがあるのだそうです。「結婚できるのか」「子どもを産めるのか」そんな悩みを抱えながら話を聞く高校生のなかには、目をそらさず、真剣そのものの目力で迫ってくる女の子、泣き出す女の子もいたそうです。

「修学旅行の時、『放射能かぶってるんじゃない?』と言われてショックだった」

「私の地元は原発から5kmのところまで震災から3年。まだ一度も帰れていません。除染もまったく進んでいないのが現状です。目に見えないものはとてもこわい。放射能も目に見えないし、流れている情報も本当なのか分からないまま毎日過ごしている」

「私の親は原発で働いている。でも誰にも言えないでいる。差別されるんじゃないかって思うから。でも頑張って乗り切りたい」

こんな福島の高校生の思いは、そっくり水俣病患者の思いと重なるのだそうです。本の一節の最後は、こう締めくくられていました。

「私は今回の事故の直接の当事者ではないけれど、水俣や自分と重ね、またそれぞれの選択をした方やその子どもの話を聞き、それぞれが苦渋の選択をしていることを感じています。」

(「みな、やっとの思いで 坂をのぼる」永野三智)

私自身、水俣病は昔のことだと思っていました。でもそれは大きな間違いで、今も、全国で起きている、現在進行形の事件だということです。

みな、差別に怯えます。では差別をするのは誰か。無関心な私です。関心を寄せ、いろんな現実学べば、差別はしなくなるように思うのです。つまり、差別は限りなくなくしていけるのではないかなと思うのです。

「生きる」とは互いの価値を認め合うこと

■私は、今日の人権学習で特に印象に残っているのは、最後の「生きるとは何か」についてです。私が思う「生きる」は、互いの価値を認め合うことだと思います。理由は主に2つあります。

1つめは、犯罪を犯してしまった人などにも心があるということです。「あの人嫌い」「いなくなればいいのに」って思ってしまうのは人間だから仕方ないと思うんです。だからといって人を傷つけたりするのは絶対にいけないことだけど、私はその気持ちを持ってしまうのも「生きる」ということだと思いました。

2つめは、自分にも生きる価値があると思えるような人に、皆がなれるといいからです。世界には、生きていることに不安を感じる人、生きるのがつらい人、たくさんいますよね。それって、その人が不安になるような行動、言動を自分たちがしてしまっているからだと私は思います。だから私は、なるべく言葉に気をつけるようにしています。私は皆が楽しく生活できるよう、自分から行動しようと思います。(6組KH)

罪を犯した人の人権についても考えなければなりません。だから、「心がない」という発言を聞いたとき、私自身、「ん?」と思ったものの、同時に私に湧きあがってきたのは、犯罪による被害者の感情です。

もし、自分が親として、幼い我が子が決めた犯罪に巻き込まれ、命を奪われてしまうようなことがあれば、もうそれは悲しくて切なくて悔しくて、相手のことを、「殺してやりたい、死んでほしい、生きててほしいくない、同じ思いを味わわせてやりたい」と思ってしまうような気がするのです。その感情はどうしようもありません。どうしようもありませんが、だからといって実際の行動に移すわけにもいきません。本当に苦しい葛藤を抱えるように思います。

多くの国では死刑制度が廃止されていますが、日本には死刑制度があります。そんな被害者感情を受けたものかもしれません。でもこれは、合法的に国が人を殺すシステムでもあります。だから、今の日本では罪を犯せば罰せられ、死刑になることもあります。でも死んでしまえば、どうしてそのような罪を犯してしまったのか、その原因は永遠に闇の中に消えたままになってしまいます。

生まれてすぐの赤ちゃんに極悪人はいません。どんな極悪人にも、「心」はあったはずです。生きていく過程のなかで、そうなってしまったと考えるのが自然だと思います。犯罪者の幼いころを知る人からすれば、あんないいところもあったのに、こんな笑顔も見ていたのに、と思うのではないのでしょうか。もし、自分の身近で大切な人が犯罪を起こしてしまっても、自分は死刑を受け入れることができるのでしょうか。合法的であれば、人を殺すことは許されるのでしょうか？私はすごく悩みます。

そんなことに少しでもならないような社会、人間関係を、今、教室につくっていく。それが、「2つめ」なのですね。私は、「ありがとう」と言いたい。それは、私自身、生きることが苦しくて、つらくて、消えてしまいたくて、どうしようもない時期があったからです。そのときは、ちょっと突かれたら、すぐに涙がこぼれそうな状態で毎日過ごしていました。息をするのも苦しくて、気持ちはずっとうつむいてばかりでした。生きていれば、誰しもそういうときはあるのかもしれませんが。そんなときに、相談できる、一言でも悩みを打ち明けられる、そんな関係をつくっていける自分づくりを、みなさんにはしてもらえたらと思います。

ちなみに、先の発言をした人の授業後の感想です。「確かにそうだなと、違う意見を理解することが

できました。他人の意見を取り入れて、たくさん話をするからこそ、人権学習はいいと思います。これからも今日のように人権学習をしていきたいと思います。」

間違った意見や、おかしいと思う意見が出たとき、大人や先生が、「それは間違ってる」と反論する場面に出くわしたことがあります。でもそれは、せっかく言った中学生を全否定してしまってる気がして、嫌な気分になったものです。中学生ですから間違えることはありますが、全否定になることなく、本人が自ら気づいて軌道修正できるような道はないのだろうか、と思います。

一方で、「それは違うと思うんだけどなー」という気持ちをグッと堪えながら中学生の発言を見ているうちに、言った人を否定することなく、自分の考えを発言することを通して、いつの間にかその人の考えが変わっていく、という場面を何度も見てきました。そのたびに、この学習、語り合う学習の凄さを感じるのです。人が変わるきっかけは何でもいいのかもしれませんが。でも、「自ら気づく」に勝る変容はないように思

います。そんな変容があるから、この時間はおもしろいし、意味があるし、必要だと思うのです。「語り合う」ことの可能性が、そこにあるのだと思います。

気づいてなかったことに気づく

■今回の防災学習で、あらためて考え方は人それぞれだなと思いました。「二つのふるさと」について一番心に残ったのは、最後の「生き方」のところでした。人によって価値観が違うと言っていた人がいて心に残ったけど、価値観が違うのは当たり前なことだと思います。でも、その当たり前を当たり前だと思わない人がいるから、人を取り残すことになってしまうのだと思います。

そして、人と別れることを考えるところで、自分にも別れを告げないといけない時がいつかはくるんだと思うと、すごく怖いです。これまで卒業式などを経験してきた、会えないと思わなかったから、つらく思わなかったんだと分かります。いつか会おうと言って別れるけど、先生の言う通り、いつか会える別れだけではないことを経験していくからこそその人生だと思うんです。だから防災と人権を一緒に照らし合わせて考えることを大切にしていきたいです。そして生活の中での当たり前に必要性を求めて生きていくことに目を向けたいです。簡単に言えるけど、実行は難しいので、まずは当たり前から考えていきたいです。
(2組ON)

価値観が違うのは当たり前。当たり前のことなんだけど、それが認められなくなることがあります。だからおかしいことになってしまうのでしょうか。それぞれの価値観は、それぞれの価値観でいい。人の命や幸せを奪わないものであれば。

先日、お世話になった方に、お礼にと贈り物をしました。大好きな柿の詰め合わせを一箱。贈ったときは、美味しいだろうな、喜んでくれるかな、と満足な気分

に包まれていました。でもしばらくして思うのです。

「もし好きでなかったらどうしよう…」
「この柿は美味しいからきっと喜んでくれるに違いない」という勝手な思い込みの価値観で、人にモノを押しつけてしまいました。喜んでくれるかもしれませんが。でももしかすると、迷惑になったかもしれません。それは相手にしか分からないものです。そう思うと、すごく不安な気持ちになりました。だからせめて、満足な気分は封印して、「お口に合うかどうか分かりませんが…」という謙虚な気持ちでいようと思うことにしました。

大げさなことでなくても、似たようなことなら身近にあるのでしょうか。「これ絶対美味し

いけん！」とか「これ絶対面白いけん！」と言ってる場面に出くわすことがあります。言うこと自体は悪くないのですが、しつこくならないことですかね。しつこく、ねちっこいのは嫌われるもんです。お互い気をつけましょう。
(12号につづく)

